

特集：ローカルガバナンスと言語教育



大会シンポジウム：講演記録

ローカル・ガバナンスと言語文化教育

シンポジスト

徳田 剛	岡 孝則	大田 ナム	権代 祥一
(大谷大学)	(国際交流ひらかわの風の会)	(株式会社 Betoyama)	(牟礼地域自治会連合会)

司会

山本 晋也	松尾 憲暁
(周南公立大学)	(岐阜大学)

概要

本稿は、2025年3月1日にKDDI維新ホール（山口県）にて開催された言語文化教育研究学会第11回年次大会の大会シンポジウムの記録である。当日の議論を再現できるように、一部音声の不明瞭な点を除き、可能な限り音声記録に忠実に書き起こした。今改めてその記録を読み返すことで、地域社会におけることばの教育の現在と未来、そして、それにかかわる私たちのあり方を考える際の一助となることを期待する。

© ALCE 2025. Except where otherwise noted, this article is licensed under the CC BY-SA 4.0 license

1. シンポジウムの趣旨説明(山本 晋也)

山本：それでは皆様、時間になりましたので、ただいまよりシンポジウムを開催したいと思います。私は本日の司会進行を務めます、周南公立大学の山本です。よろしくお願いいたします。もう1人、岐阜大学の松尾さんと、共同で司会をやります。

本日のテーマ、「ローカル・ガバナンスと言語文化教育」ということで、4名のシンポジストの方をお招きして、お話しして頂く予定です。私のほうから、まず初めに、簡単な本日の流れについてご説明をさせていただきます。そのあとに、シンポジストの方々からそれぞれ、ご報告を頂きたいと思いま

す。そして、シンポジストの方のご報告のあとにフロアと共有して、全体での質疑応答という形で行いたいと思います。最後にまとめという流れになります。それでは、まず初めに本シンポジウムの経緯を少しだけお話しさせていただきます。

今回の「ローカル・ガバナンスと言語文化教育」という大会テーマですが、せっかくなので山口らしいテーマがいいなということを考えていたんですけども、山口ということで地方、地域というのは何か一つキーワードになるかなということが話に挙がっていました。じゃあ地方の課題って何だろうと考えたときに、まず一つは、深刻な人口減少の問題とそれへの対応として、外国籍の人々の

受け入れを軸とする共生社会の構築というのが非常に大きな課題になっています。ただ、こういった課題について考えていくうちに、実はこれって地方だけの問題じゃなくて、実は都市部でも同じような状況があって、これはもう日本全国どこでも共通した課題ではないかというような話になりました。

ただ、共通した課題ではあるけれども、こういった課題に対応していく際にやはり地方特有の事情というのがあって、なかなか同じやり方ではうまくいかないと。その地域独特の事情に対してそれぞれのやり方、それぞれのつながりを生かして対応しているんじゃないかというお話がありました。そのそれぞれの地域でどんな人、どんな組織が、どういうふうにこの課題に対応しているのかということを考えようとなったときに、じゃあ、この中で、恐らくここにいらっしゃる皆さん、ことばの教育に携わる方々が多いと思いますが、こんな「私たち」に何ができるんだろう、というような問いを立てました。この問いに対する手がかりが、今回のテーマである「ローカル・ガバナンス」という概念になります。

ローカル・ガバナンスとは何かということなんですけども、これ、このあと詳しく徳田先生のほうからお話を頂きますが、ざっくりとした定義として石井ほか（2019）が出しているもので、地域にかかわる多様な利害関係者、ステークホルダーが連携しながら行う「地域における具体的な個別課題への対応」（p. 52）のありようというような定義があります。ここで言う個別課題というのが、その共生社会の構築を巡るさまざまな課題ということになるんですが、じゃあ、そういったローカル・ガバナンスという枠組みの中で、地域社会のガバナンス構造の中にことばの教育というのはどういうふうに位置づけられるのか。そして、そこでどんな役割を果たすことができるのかということ、本

日、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

それではさっそくですが、登壇者の方をご紹介したいと思います。お名前をお呼びしますので、一言ご挨拶を頂ければと思います。さんづけで失礼いたします。徳田剛さん。

徳田：京都の大谷大学からまいりました、徳田と申します。よろしくお願いします。主には地域社会学と移民政策研究、このあたりがメインのフィールドになっていまして、最近は地方における外国人受け入れ、これを現場ベースで、調査ベースでやっているということで、今日、お話しさせていただきます。よろしくお願いします。

山本：では、お願いします。

岡：山口市の市民活動団体の国際交流ひらかわの風の会の会長をしています、岡孝則と申します。私どもの会は、のちほど詳しくは説明しますが、山口大学がある場所です、平川という所はですね。その留学生たちとその家族、そういう人たちをいかにサポートしていくか、地域とのパイプ役としてどういうふうなサポートができるかというのをお話ししたいと思います。よろしくお願いいたします。

大田：こんにちは。株式会社Betoyamaの大田ナムと申します。ベトナム国籍で、約10年前、山口に来て、今年、今、10年目になります。それで、外国人の立場としてお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

権代：こんにちは。権代祥一と申します。牟礼地域自治会連合会の会長をやらせて頂いております。実は、こちらにいらっしゃる松尾さんと山本さんとベトナムで一緒させて頂きまして、いろいろお世話になりました。その縁で今日、登壇させて頂くということになりました。よろしくお願いいたします。

山本：それではさっそくですが、シンポジストの方々からの報告に移りたいと思います。では、まず徳田さん、よろしくお願いいたします。

2. 外国人受け入れにおける「ローカル・ガバナンス構造」と地方部での課題:地域日本語教室が果たす役割と存在意義に着目しつつ(徳田 剛)

2. 1. はじめに: 報告のねらいとその背景

それではお話を始めさせて頂きたいと思います。テーマ的には「外国人受け入れにおける「ローカル・ガバナンス構造」と地方部での課題——地域日本語教室が果たす役割と存在意義に着目しつつ」ということで、えらい大きなタイトルをつけてしまっています。一応、資料も結構準備したんですけど、これ、まともにしゃべると1時間物の話になっちゃうんで、ちょっと難しいので、かなり駆け足で飛ばしながらの内容になります。で、ゆっくり読みたいという方もいらっしゃると思うので、このメールアドレス (tokuda@res.otani.ac.jp) をメモって、写メって頂いて、あとでご連絡頂くか、あるいは名刺交換させて頂いたら、また資料をお送りさせて頂けたりするので、興味のある方はお声かけください。よろしくお願いします。

まず今日の報告の狙いとその背景ということで、簡単な自己紹介です。出身は神戸大学で、地域社会学、あと宗教社会学、移民政策、このあたりがメインなんですけど、結構いろいろやっています。一応、博士論文のテーマとしては、よそ者、英語で言うと Stranger です。まあ、よそ者論みたいなテーマで、地域社会とよそ者みたいな、そういうふうなことで本を書いたりしています。外国人の話も一つのよそ者とはいえるので、自分的には応用問題みたいな感じですね。で、実は私、神戸大で、ちょうどもう30年たったんですけど、阪神・淡路大震災の95年1月17日ですね。これ、卒業論文出した1週間後だったんですけど、ちょうど大学に上がるタイミングに地震に遭いまして、それで長田区でフィールドワークをやったりしていました。そのあといろんなテーマをやって、あと宗教ですね。愛媛県、

そのあと就職したんですが、地方のカトリック教会ですね。ここで移民コミュニティとの出会いがあって、そこから調査が始まります。今は仏教系の大学にいらして、過疎地のお寺の調査なんかもやっています。

最近は移民政策研究がメインで、主に、どちらかというと地域社会側ですね。行政の担当の方とか、国際交流協会の方とか、NPOの方とか、今日、来られるような方々に聞き取りをしていろいろ教えてもらってというような調査がメインなんですけど、外国人住民を支える人たちの支えになるような仕組み作り、特に地方あるあるなんですけど、なかなか自分たちでどう現状を捉えて、どう活動していいかわからないと、そういう方が結構多いので、地方特有の難しさとか、活動の仕方とか、こういうものをなるべく発信していくということで、そういう研究を主にやっています。

で、先ほど言いましたけど、2011年、ちょうどこれは「3.11」の1カ月後に愛媛県の大学で仕事を始めて、それで県内のカトリック教会などを回り始めたところ、愛媛県内の日本語教室であったり、あるいは松山に朝鮮学校があって、そこの在日コリアンの研究している仲間がいらして、そういう人たちと地方の外国人の問題を考えていこうかということで研究を始めています。「移住と共生」研究会とか一応主催しています、年1, 2回のペースで、主に地方に特化した地方での外国人関係の研究発表、現場の方に結構しゃべってもらったりとか、そういう研究会を主催しています。

で、地方での多文化共生の仕組み作りですね。ちょっと書籍見本での展示に置かしてもらったんですけど、『地方発 多文化共生のしくみづくり』という本(徳田ほか, 2023)を1年ちょっと前に出したんですけど、そういう形で地方からいろいろ思いというか、地方の方々がどう働きやすく、あるいはどう上手に関係作るかとかそういう視点でやっています。最近はカナダの地方というか田舎のほうに移民を呼んでくるというか、移民を誘致するような政策が国策で進んでいます。そういうことなんかの調査もしています。



写真1. カトリック松山教会での英語ミサ後の様子 (©徳田)



写真2. 伯方島（愛媛県今治市）での出張英語ミサ (©徳田)



写真3. 「いずも多文化こどもプロジェクト」 (©徳田)

写真1は現場の様子です。カトリック松山教会、英語ミサです。主にフィリピンの方が多くんですけど、英語話者の方が月1、2回集まって英語でお祈りするってそういうふうなことです。あとでパーティーやっておいしいご飯食べます。写真2は伯方島の造船の技能実習生ですね。この方々の寮に行くと、神父が一



写真4. 地方での母語・母文化教育：四国朝鮮学校 (©徳田)

番前に立っていますが、出張英語ミサみたいなものをやっているということで、なかなか地方だと教会に行ってお祈りするとかそういう機会がないので、こういうふうなこともやって、これ同行取材しました。写真3は出雲市のブラジルルーツの子どもたちが、なかなか勉強が大変なので補習のお手伝いをする放課後教室のようすです。それから、なかなか地方ではテーマ化されてないんですけど、母語、母文化教育ですね。写真4は松山市の四国朝鮮学校で、これは地方での母語、母文化教育のはしりといえると思います。これ学校見学の様子なんですけど行かせてもらったりしています。写真5、6は研究会の様子です。これは愛媛県でやった回のものですけれども、こんな感じで、研究者と現場の方が集まって共有するような趣旨の研究会をやっています。

2. 2. ローカル・ガバナンスとは何か

まずローカル・ガバナンスって何、というお話ですね。これについての解説をしますということと、それから地方で最近、地方の外国人が増えているなという印象を皆さんお持ちだと思います。山口もそうだと思います。その傾向の確認ですね。それから、地方での多文化共生とかの難しさとか、あるいはどこがどういう役割を果たしながら回っているのかというそのお話を少し紹介します。その上で、これから何をし



写真5, 6. 「移住と共生」研究会: 愛媛県, 京都府などで年数回開催 (©徳田)

ていったらいいのかというところで、これ僕なりの、現在進行形で調べていることとか感じていることについていくつかお話しをして、その地域の日本語教育について自分が考えていることについてしゃべりたいと思います。

では、ローカル・ガバナンスとは何かということですが、このあたり、予稿集で割とちゃんと書いた(徳田, 2025)ので、そちらをまた見て頂ければと。まず、ローカル・ガバナンスの定義ですが、ガバナンスという言葉は漢字で言うと統治という言葉ですね。これが非常に近い。何らかの社会、諸個人や集団の集合体が秩序を保ち、諸施策を円滑に実行できる、それも統治ですね。割と平和で、しかも物事が進められる状況です、これがガバナンスということとイコールです。とりわけ意思決定や運営の調整や管理、それから関与する主体間の調整を指すということですね。こういうふうに定義をされています。これにローカルがつくということで、国家より小さい範囲ですね。町内会とかというレベル、それから市町村レベル、都道府県レベル、あるいは複数の都道府県の広域連携ですね、こういったものもローカル・ガバナンスの範囲には入ってくるかなと思いますが、地域社会に関する統治の在り方、それがローカル・ガバナンスの定義ではないかと思います。

政治学とか政策学でよくいわれるのは、「ガバメントからガバナンス」、ガバメントというのは政府ですね。

日本政府、あるいは自治体も地方政府ということになりますが、政府主導から複数のアクターの連携によるガバナンスへという、そういう変化が指摘をされます。統治が旧来の政府、国や地方自治体によって行われる場合はガバメントという。それに対して、多様な主体によって担われる場合ガバナンスという言葉を用いられ、最近ではガバメントからガバナンスへという変化が指摘されます。

この変化の背景には、1番目に福祉国家の後退と新自由主義思想の浸透ということで、アベノミクスなんかそうだろうし、最近のトランプ政権なんかその新自由主義の表れといっていいと思います。それから2番目に価値観やライフコースの多様化、3番目に分権化の進展の3点ですね。こういうふうなことでガバメントからガバナンスへという変化がみられるということです。1980年代初頭までは、政府を中心とした命令や統制、いわゆるトップダウン、よく自治体の首長さんが中央にお伺いを立てているとかそういうようなことがあります。垂直型ヒエラルキー型構造という中でパイの分配、これは全国均等にばらまく、そういう中での調整でした。しかし「新自由主義」、「新公共経営」、「第3の道」等の市場による調整、これはいわゆる資本主義とか自由主義ということもあるんですが、それもいろいろ弊害が出てくる。その中で、ヒエラルキーでも市場でもないネットワーク型の調整の台頭が指摘される、いう

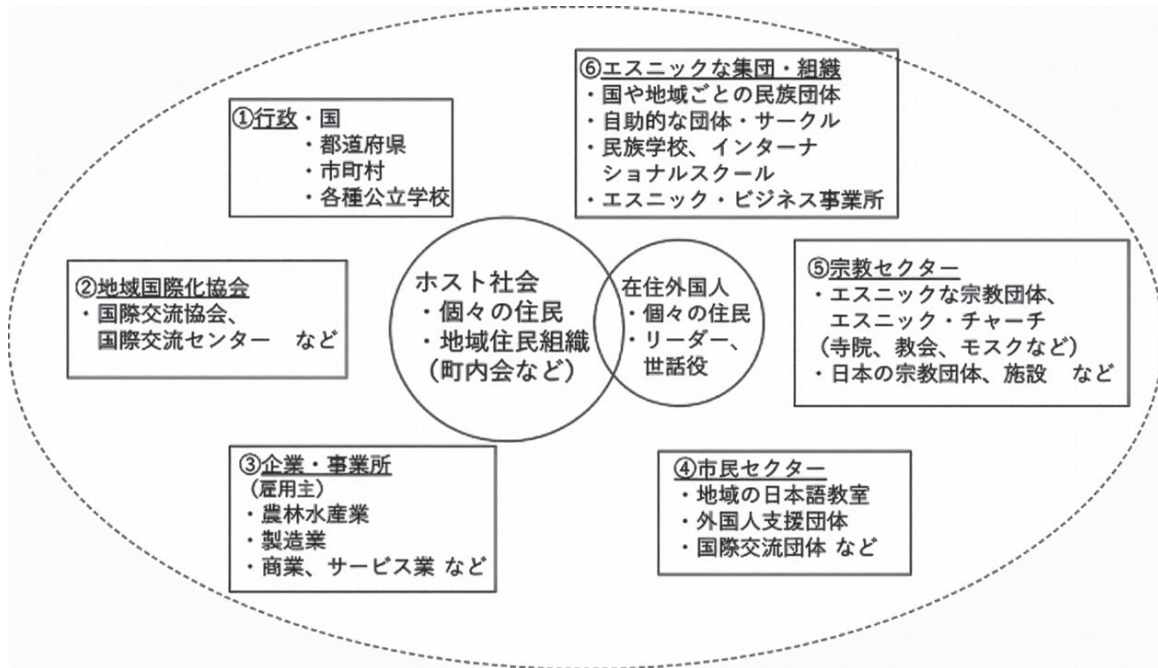


図1. 外国人受け入れに関わる構成団体（ローカルガバナンス構造）。出典：徳田剛（2023）。地域社会の多国籍化・多文化化対応におけるローカルガバナンス構造。徳田剛，二階堂裕子，魁生由美子（編）『地方発 多文化共生のしくみづくり』（p. 19）晃洋書房。

ことですね。で、公を巡り政府や企業，住民，非営利組織など自律性を持った多元的な主体が参加するとともに，相互関係や交渉を通じて，社会的，経済的な問題に対する意思決定を図るプロセスですね。このような多様な団体，個人がいろんな役割にかかわり合いながら物事を動かしていく，これがそのガバナンスということであろうということです。ということで，ローカル・ガバナンスはそのように位置づけておきます。

2. 3. 日本での外国人受け入れに関する「ローカル・ガバナンス構造」

では，この外国人受け入れというそのテーマに特化した形で，このガバナンスを考えるとどういう話になるか，これ（図1）は私がまとめたものですね。地域において外国人受け入れ，あるいは外国人のサポートにかかわる，主にホスト社会側のアクターとしては6つ挙げられるでしょう。一つは行政，都道府県，市町村ですね。それから2番目に地域国際協会，これは正式名称なんです，国際交流協会とか大体そういう

名前がついていますね。それから3番目に企業，事業所。4番目に市民セクター，これはボランティアやNPOなど。それから5番目に宗教セクターということで，これは外国人を考えるうえで結構大事になってきますけど，ことにカトリック教会とか，最近モスクも全国にあります。というところでも重要なアクターになってくる。そして6番目はエスニック・コミュニティということで，外国ルーツの人たち自ら回していく団体など。今日ご登壇されるナムさんはそのキーパーソンだと思うんですけども，エスニックな集まりというのがありますね。大体この6つのアクターがそれぞれの役割を果たし，相互に連携をしながらこの多文化共生な外国人受け入れを進めていくというのが定型ではないかというのが一応私のまとめであります。

そういった中で地域日本語教室，これも複数のアクターにまたがっている可能性があるんで，そのあたりを整理します。私が聞き取り調査の中でよく伺うのは，地元の名士，元学校の先生，校長先生だった方とか，あるいは主婦スタッフみたいな，ボランティアベースで小さな教室を設置する，運営されてこられた

というパターンを多く聞きます。先ほどの1から6で言うと4番の市民セクターですね。ボランティアでこれを課題として取り組もうという人たちが自発的に参加し、運営を支えているということですね。これは、まだ地域の中で課題として共有されていないが大事ななどということについて、気がついた人が動くという、そういうタイプのアクターとして地域日本語教室は位置づけられるんじゃないかと考えます。

で、これはもう皆さんご存じのことですが、日本語教育推進法の施行により、ここで自治体、さっきの1番の行政ですね、ここが非常に出てくるようになった、あるいは出てこざるを得ないようになった、法律の影響ですね。市町村ベースで日本語習得機会の提供に向けた体制整備が大きく進んできているということが言えるでしょう。特に地方の場合は、一つの自治体の中に日本語教室がないところ、これを空白自治体とよくいいますけれども、空白自治体の解消に向けて行政や都道府県の国際交流協会が働きかけ、サポートを行う

ということで、空白自治体をできるだけなくしていきましようというのが全国で、この法律をきっかけに一気に進んだという感じを持ちます。そうしますと、先ほどの6つのところで言うと、もともとの活動主体である市民セクターをベースに、行政と地域国際化協会がかかわっていく、これは、法律の制定によってこういうことが促されたということです。あとで使う表現としては政策資源の整備、法律ができるということですね。これを政策資源と私は呼んでいますが、これが整備されることによって活動資源の充実を促した、地域で日本語を教えるという活動が非常に充実する流れができたというものとして、ポジティブに評価できるのではないかと考えています。

それで、図1の中心にホスト社会住民と外国人住民とがいて、6つのセクターが周りで囲んでいて関与する。これは本に載せています。それから活動資源と政策資源、どのような団体、個人が活動しているかと、それぞれが働きやすいルールができていくか、この二

活動資源	1. この自治体には外国人の受け入れや多文化共生施策に関する業務の専従職員がいる。	/3
	2. この自治体には外国語で対応できる職員・スタッフがいる。	/3
	3. この自治体には「多文化」「外国人」などの名称の部署がある。	/3
	4. この自治体内には地域国際化協会（国際交流協会など）がある。	/3
	5. この自治体内には外国ルーツの人々向けの日本語教室がある。	/3
	6. この自治体内には外国ルーツの人々をサポートする市民団体がある。	/3
	7. この自治体内には外国人労働者を受け入れている企業や事業所がある。	/3
	8. この自治体内には外国人が集まる宗教施設（寺院、教会、モスクなど）がある。	/3
	9. この自治体内には外国ルーツの人々の子弟が通うエスニックスクールがある。	/3
	10. この自治体内には外国ルーツの人々向けの商品を提供するエスニックショップがある。	/3
活動資源小計		/30
政策資源	11. この自治体では表示や資料に外国語や「やさしいにほんご」を併記したものがある。	/3
	12. この自治体では外国人の受け入れや共生に関する条例が制定されている。	/3
	13. この自治体には「多文化共生推進プラン」もしくはそれに類する政策目標が策定されている。	/3
	14. この自治体の首長は、政策目標の1つとして外国人の受け入れや多文化共生を掲げている。	/3
	15. この自治体には外国人の受け入れや多文化共生に積極的な議員がいる。	/3
政策資源小計		/15
合計		/45

0=あてはまらない 1=あてはまる 3=大いにあてはまる

図2. 自地域の活動資源・政策資源のチェックリスト。出典：徳田剛（2023）. 地域社会の多国籍化・多文化化対応におけるローカルガバナンス構造。徳田剛，二階堂裕子，魁生由美子（編）『地方発 多文化共生のしくみづくり』（p. 23）晃洋書房。

つを評価することによって、団体、個人はいるけど非常に動きにくいとか、活発ではないというようなこともありますし、団体、個人少ないけれども政策面ではすごく頑張っている、そういうところもあると思います。これを考える際に、この活動資源と政策資源という視点で評価をすればいいのではないのでしょうか。国だと憲法、法律、自治体だと条例、あるいは多文化共生推進プラン、こういったルールができていくかできていないかというのが非常に効いてくる感じになりますね。

これ、予稿集（徳田、2025）にも載せたんですけど、私なりにわかりやすくするためにチェックリストというのを設けています（図2）。活動資源10項目、政策資源5項目で、これ、サッカーの勝ち点制度をイメージしたんですけど、0点、1点、3点みたいなことで評価をすると、どこが強い弱いというのがわかるんで、皆さんのお住まいの地域とかで一度試してみたいかがでしようかという提案です。

2. 4. 地方在住外国人の増加と受け入れ課題

次です。地方在住外国人の増加、少し統計資料を

見てみます。どういう課題があるかですね。まずこれ（表1）は、在留外国人統計を計算したものです。2012年というのは2010年代の一番外国人が少なかった年、リーマン・ショックと東日本大震災で外国人が一番減ったのが2012年で、2010年代のピークはコロナ直前の2019年のということで、これを比較したものです。

左側は人口増加数、何人増えたかっていうのを都道府県ごとに見たものです。東京、愛知、埼玉、神奈川、千葉、大阪、完全にこれ、大都市圏ですね。ここがものすごい数の外国人が増えているということがあると思いますけども、増加率、どれぐらいの割合で増えたかっていうのを右で見てみますと順位が全く変わるんですね。沖縄が220%、2倍以上の増え方をしている。それから熊本、鹿児島、その下に宮崎がありますね。それから香川、島根、佐賀と、結構地方が入ってきているんですね。2010年代というのは非常に、もともと少なかったところの外国人人口が急激に増えたというふうな、そういうふうな理解でいいかと思います。上位トップ15位からははずれるんですが、一番下に山口も載せておきましたが、このときの

表1. 2010年代の都道府県別外国人人口増加数・増加率（「在留外国人統計」より集計）

	2012.12	2019.12	人口増加数		2012.12	2019.12	人口増加率
東京	393,585	593,458	199,873	沖縄	9,404	21,220	225.6%
愛知	195,970	281,153	85,183	熊本	9,110	17,942	196.9%
埼玉	117,845	196,043	78,198	鹿児島	6,317	12,215	193.4%
神奈川	162,142	235,233	73,091	北海道	22,027	42,485	192.9%
千葉	105,523	167,512	61,989	宮崎	4,125	7,850	190.3%
大阪	203,288	255,894	52,606	香川	8,277	14,266	172.4%
福岡	53,356	83,468	30,112	島根	5,486	9,342	170.3%
静岡	77,353	100,148	22,795	佐賀	4,360	7,367	169.0%
茨城	50,562	71,125	20,563	宮城	14,214	23,986	168.7%
群馬	41,181	61,689	20,508	福島	9,259	15,559	168.0%
北海道	22,027	42,485	20,458	埼玉	117,845	196,043	166.4%
三重	97,164	115,681	18,517	青森	3,930	6,386	162.5%
広島	38,545	56,898	18,353	千葉	105,523	167,512	158.7%
岐阜	45,878	60,206	14,328	福岡	53,356	83,468	156.4%
三重	42,879	56,590	13,711	石川	10,839	16,881	155.7%
山口	13,495	17,892	4,397	山口	13,495	17,892	132.6%

表2. 外国人人口の多寡による全国の都道府県の3区分（「在留外国人統計」より集計）

区分	都道府県名（外国人人口数の多い順）
第1群 （外国人人口数が10万人以上）	東京都、愛知県、大阪府、神奈川県、埼玉県、千葉県、兵庫県
第2群 （外国人人口数が2万5千人～10万人未満）	静岡県、福岡県、茨城県、群馬県、京都府、岐阜県、三重県、 広島県、栃木県、北海道、長野県、滋賀県、岡山県
第3群 （外国人人口数が2万5千人未満）*	宮城県、沖縄県、富山県、山梨県、新潟県、熊本県、福井県、 山口県、石川県、福島県、奈良県、香川県、愛媛県、大分県、 鹿児島県、島根県、長崎県、山形県、岩手県、和歌山県、宮崎県、 佐賀県、徳島県、青森県、鳥取県、高知県、秋田県

*2010年代までの人口。

表3. 都道府県3区分ごとの外国人人口数 *

年度	2007	2012	2017	2021
第1群	1,301,359 60.4%	1,275,517 62.7%	1,632,617 63.7%	1,744 63.2%
第2群	606,439 28.2%	531,529 26.1%	643,344 25.1%	703,917 25.5%
第3群	245,175 11.4%	222,812 11.0%	283,789 11.1%	310,520 11.2%
未定・不詳	- [#]	3,798	227	1,794
総数	2,152,973	2,033,656	2,561,848	2,760,635

* 各群下段は構成比。 [#] 累計なし。

統計をカウントすると、1万3,000人から1万7,000人の増加ですね。割合的に言うと130%, 30%増というふうなことで、2012年から19年で山口も結構増えている、こういう具合に捉えることができます。

で、地方の外国人が増えている、どう捉えるか、これなかなか難しいんですけども、私はちょっとシンプルな方法で、人口が2万5,000人未満の県ですね。第3群ということです（表2, 表3）。この集計値をもって、地方の外国人の増減を見てみようというのを、ちょっと雑ではあるんですけど、一応そういう形で分析をしました。

これ（表3）を見ますと、2007年、12年、17年、21年、およそ5年ごとにとっているんですけども、第3群を見ると11.4, 11.0, 11.1, 11.2ということで、およそ1割強、第3群の合計値はおよそ1割ぐらいということです。2万5,000人未満の県の合計はおよそ1割で推移しているということで、全国的に増えているけど地方も増えている、そういう形で表していますね。

で、在留資格で見ると（表4）、圧倒的に技能実習

生の割合が高い、11.1%に対する26.8%, 特定技能が21.1%, 技人国は8%なので、まだ少ないけどもこれから増えるでしょうということです。

ベトナム籍を見ますと（表5）第3群が3,600人から7万6,000人、すごい増え方をしています。このとおり技能実習生だと。逆に中国籍は減っていて、都市部への集中が進んだ。地方の場合は外国人住民が散住しています。これは技能実習生と国際結婚の方が多いので、どうしても集住しづらいということがあります。散らばっているとなかなか見えにくいということがあります。

それから2番目、国際交流を最近まで頑張ってきたので、外国人住民への支援や多文化共生にピンときてくれないということがあります。それから3番目、その関係もあって、なかなかそれを支えてくれるボランティアさんや担い手の確保、発掘が難しいということです。それから4番目、これはこれから問題になりますが、都市部と比べるとどうしてもお給料が安いとか娯楽が少ないとかそういうふうなことがあるので、選

表4. 在留資格別 都道府県3区分ごとの統計（「在留外国人統計（2021年度）」より集計）*

	総計	特別永住者	永住者	定住者	留学	技能実習総計	特定技能
第1群	1,744,404 63.2%	206,635 69.7%	545,282 65.6%	110,893 55.7%	139,108 66.9%	99,661 36.1%	20,265 40.8%
第2群	703,917 25.5%	64,818 21.9%	207,840 25.0%	71,403 35.9%	46,693 22.5%	102,528 37.1%	18,901 38.1%
第3群	310,520 11.2%	24,946 8.4%	77,958 9.4%	16,593 8.3%	21,887 10.5%	73,931 26.8%	10,500 21.1%
未定・不詳	2,098	24	58	104	126	142	0
その他の合計	583	36	182	10	1	93	8
総計	2,760,635	296,416	831,157	198,966	207,830	276,123	49,666

* 各群下段は構成比。

表5. 主要国・地域別 都道府県3区分ごとの統計（「在留外国人統計」より集計）*

	ベトナム				中国			
	2007	2012	2017	2021	2007	2012	2017	2021
第1群	23,470 63.7%	31,253 59.7%	142,866 54.4%	224,561 51.9%	366,730 61.0%	417,978 64.0%	517,834 70.8%	533,325 74.4%
第2群	9,776 26.5%	14,882 28.4%	74,502 28.4%	132,158 30.5%	143,039 23.8%	147,750 22.6%	137,557 18.8%	122,011 17.0%
第3群	3,614 9.8%	6,139 11.7%	44,927 17.1%	76,181 17.6%	97,120 16.2%	86,532 13.3%	75,272 10.3%	60,979 8.5%
未定・不詳	- [#]	93	110	34	- [#]	335	227	291
総数	36,860	52,367	262,405	432,934	600,809	652,595	730,890	716,606

* 各群下段は構成比。 [#] 累計なし。

ばれにくく他地域に流出しやすいということがあります。今までは技能実習生も転籍制限で何とかとどまってもらっていたけれども、育成就労になったときにどうなるかということが今非常に議論されています。

それから、地域の日本語教育における人材不足ということで、それはこの学会のテーマになりますが、法律ができました、各地で日本語教室を作りましょうってなっていますが、なかなか後継ぎがないという状況がありますね。ニーズは上がっているけどマンパワーは縮小している、これをどうするかということです。この間の静岡市役所でも同じような話をしたんですが、外国人は増えるんだけど教える人の確保が追いついてない。国が外国人を増やす方向で持っていっているのに、人の確保は自治体任せでは無理だろうという、そういうふうな話ですね。このあたりは課題です。

それから育成就労の影響ということで、技能実習生に頼りきれないということで、特定技能とか技人国の採用、これが非常に増えてきています。そうなるといわゆる中長期定住、それから家族帯同が起こる人たちが地方でも増えてくるだろう、こういうふうに政策を考えていかないとねって話が課題として挙がっています。

2. 5. 課題と展望：日本の地方部で何に取り組んでいけばよいか

それでは日本の地方部、このような状況の中で何に取り組んでいけばいいのかということを、少し私なりに考察していきます。実は最近、日本よりも韓国のほうが人気が出てきているというお話です。賃金は高いし、韓国語の習得なんかも、要は公費でまかなわれていますので、お金払わなくていいっていうようなことで

非常に政策が充実、しかもお金がもうかるので、日本よりも韓国に行くってことです。このあたりはまたナムさんからベトナム本国のお話を聞けるとありがたいですね。それから、中国はもう技能実習生が来なくなった、質が下がったので来なくなった、これ、ベトナムもその道をたどりつつあるということのお話ですね。今、インドネシアとかネパールとかミャンマーに行っているけれども、これ、焼き畑農業じゃないけどね。刈りつくしたら次、他にいないか、でも来ない、また次の国となかなかそういうわけにもいかない。で、もたもたしているうちに、韓国や台湾がかなり頑張ってきているという、そういう状況ですね。

その韓国における政策の整備なんですけど、韓国は2007～8年には基本法を制定。それから、今、ワンストップセンターは日本でもやっていますが、2022年度には、多文化家族支援センターが韓国全土で228カ所、うち地方では163カ所ということで、かなり充実していますね。それから、これは非常に重要ですが、欧米型の統合プログラムを持っていて、計415時間の韓国語の授業と100時間の韓国社会の授業を、教材費以外を公費で運用ということですね。要は外国人側の持ち出しなしで受けられるということです。ここが決定的に違うと思うんですね。それから、今、技能実習制度の改変が日本でも進んでいますけど、これも既に2004年から雇用許可制っていう、これも欧米型の一步先をいった形を導入しています。韓国は移民政策分野ではかなり進んでいる、日本はかなり遅れていると、そういう認識が必要だと思います。そしてさらに韓国では、2024年に地域特化型ビザというのも本格的に導入されている。要は地方に5年住んでくれたら永住権も取れていくということですね。移民を地方に分散するという、カナダなんかでかなり積極的にやっていますが、これも韓国が導入を始めている。山口もそうだと思いますが、製造業とか、農業、漁業とかも人手不足問題が深刻なんだけれども、うかうかしているとよその国に持ってかれますよっていうこ

とは強調しておきたいと思います。

以下は、韓国の移民政策学会会長の話です(木下, 2024)。韓国は少子化などの社会課題解決のために、積極的な移民政策を取っています。少子化はどこも体験すること。社会を回すためには外国人を受け入れるしかない。韓国も結構保守的で、外国人に対する拒否反応はあったけれども、もう移民を受け入れる時期にきたというふうに雰囲気が変わったとのこと。日本では、まだまだアンチ外国人の意見が多いですけどもね。そんなことを言っていて大丈夫かという話があります。最後に、外国人の人材獲得で日韓は競争することになるが、何が勝敗を分けるか。まず、賃金の高さ。それから、永住権を得て家族と暮らせるかどうかということですね。それから教育、医療、福祉サービスなどが非常に重要になるということです。これは中長期型プラス家族帯同を前提として地方でも備えていかないと、こういうところでは生き残っていけませんよということで、これは踏まえておいたほうがいいんだろうというふうにいえる。

さあ、日本の状況ですね。これは毛受敏浩さんという、元・日本国際交流センターのキーパーソンなんですけど、ベトナムでは韓国の雇用許可制は評判がよくて、ものすごい人気。だけど、日本の実習制度はもう人気がない。これは、ある山形県の市長が、どうすれば外国人の定住を増やせるかという相談を受けたという話(毛受, 2019)ですね。何をやっても人口が増えない。このままでは町がつぶれる。外国人を増やすしかない。恐らくこういう自治体が一気に増えて、外国人の奪い合いが日本でも起こるかもしれません。これはちょっと考えておいたほうがいいですね。

さて、先ほどの定住型家族帯同への対応、私、今、仏教系の大学にいますので、四苦八苦の四苦ですね。「生・老・病・死」っていうのがあるんですけど、ここに育てているの「育」を足しました。「生」は、子どもが生まれることに対するサポート。「育」は子どもや若者が成長していく、教育やキャリア支援のサポートで

すね。「老」は年金や介護など、老齢期のサポート。「病」は健康保険や医療通訳等のサポート。「死」は日本で死去した外国人住民に関する手続きや葬送、慰霊の問題。こういったことは都市部では在日コリアン、日系ブラジル人で問題になっているところだけでも、これは地方でもこれから話題になってくると思います。「生・育・老・病・死」への対応ですね。このあたりは課題になるというふうに私は見えています。

今の日本で何ができるかについては、市町村で条例作りまで持っていきませんかという、このあたりを少し考えています。基本的には、外国人向けの移民政策は国の政策レベルの話なんですけど、日本政府は非常に動きが鈍いというのがあります。そこで一部の自治体は、多文化共生推進プランを作って進めてはいるけれども、まだまだですね。この政策はあくまで努力目標なんで、パワーが弱いということです。

それでは、最後の締めのところですね。一応、これ、地域の仕組み作りです。多文化共生の仕組み作りということを中心と考えていて、地域の日本語教育について思うところを少しまとめてみました。

まず、すごく希少な存在っていうか、先に述べたように、どうしても政策資源、活動資源が不足するところですが、地域の日本語教室での方々が支えておられたという感じが非常にあります。まずはこちら、日本語習得のための身近な場所として頑張っておられる。それから、日本社会、日本文化との最初の接点となる場所ということですね。

それから、あとは、ホスト社会住民や外国ルーツ住民の出会いの場として。サードプレイス論、第三の場所というのが最近よくいわれますが、地方において、割と散らばって孤立しやすい外国ルーツの人たちにとってのサードプレイス、家庭と職場以外のつながりの場所というふうなことで、地域日本語教室がそういう役割も果たしてきたと考えます。

それから、いざというときの相談先、支援へのつなぎ手、非常時、災害時などの安否確認の担い手とし

て、これ、セーフティネット機能と呼んでいますが、そういう場所としても機能しています。東日本大震災で、日本語教室の方々に国際交流協会の方が安否確認で非常に支えてもらったという話をお聞きしています。

それからあと、外国ルーツ住民をウェルカムしサポートする地域のキーパーソンの供給源として、いわゆる人材育成機能というのも担ってきた。愛媛県、その他で、現場のキーパーソンの方、たくさんお目にかかっているんですけども、この地域日本語教室の出身者の方が多いですね。もともとは日本語を教えていたけれども、いろいろ呼ばれたりとか、いろんな経緯で、国際交流協会のスタッフやっていますという方とのおつき合いとかお話を伺ったりする機会が多いので、人材の供給源になっていますね。

だけど、課題点は山積みのものであるということで、これは日本語教育に限らずですけども、多文化共生関連の施策を推進するうえで、専門性の高い諸業務が低賃金で雇用される女性スタッフに多くを負っている現状ということが、能勢さんという方が指摘しています（能勢、2025、第9章）。移民問題の解決と財政難の解消という難問は、高学歴で専門スキルを持つ女性支援者が低賃金労働を受容することによって解決されたかのように装われるのであるという、これ、非常に重要な指摘だと思います。日本語教育の現場の方、非常に女性率が高いですね。何というか、夫の稼ぎがあって何とか回しているけど、この仕事だけでは食べていけないよねっていう、そういうふうな状況はあるかと思います（徳田、2019）。

二つほど、これからの日本語教育に関する課題ということで論点を出します。職業、なりわいとしての日本語教師の条件整備ということです。ボランティア、非正規、パート労働頼みの状況。それから、市民活動全般にも言えますが、単独で食べていける、割に合う職業にはなれていないということですね。長くなりましたが以上です。

2. 6. 質疑応答 (徳田氏)

山本: 先生, ありがとうございます。そうしましたら, 今のご発表に関して, 事実確認を含めて質問がありましたら, 挙手をお願いいたします。いかがでしょうか。

男性A: 非常に問題意識としてわかりやすくお話くださって, ありがとうございます。例えば条例化するってなった場合には, 議会とか, やっぱり公式の意志決定プロセスに載せる必要があって, 議員の方とか, あるいは首長さんとかは, こういったボトムアップの草の根のボランティアさんからの声という発想のところが難しくて, もうそれらをフォーマルな意思決定プロセスに載せて, 条例化だとか制度化っていうことに進んでいくためには, 主にこういった取り組みが中心になっていくのかというところ, ちょっとご質問させて頂ければと。

徳田: はい, ありがとうございます。これ, 移民政策, あるいは外国人受け入れ, あるいは多文化共生政策っていうものが, 行政の中だけのルールとか運用レベルで回しすぎてきた, これ, 非常に問題だと思いますね。

国がそもそも基本法を作ろうとしない, 作れないのは, 国会の審議をとおさないといけない。そうすると, 要はガラス張りの状況の中で, 日本としては外国人をどう受け入れるのか, あるいはどういうサポートをどういう負担を持ってやっていくのかっていうのをガラス張りでようやらないから, だから法律の制定ができないんですね。

というふうなことがあるので, ここはむしろチャレンジしていかないといけない部分, 非常に難しいのは, あるいはヘイト的な人たちとか, アンチ的な人たちがわんさか寄ってくるのは, これも承知のうえなんですけど, そこの部分を経ないと, 先ほどの韓国であったり, あるいは欧米の, 人手足りない, 外国人入れるしかないって腹くってやっ

ているところに全部持ってかれちゃうっていうかな。やっぱり日本国内だけで人口, もちろん, 日本もダウンサイジングで, 人口も半分に減っても構いませんっていうなら別だけれども, 全国各地である程度のインフラなり維持するうえで, 外国の人に手伝ってもらおうということは不可欠だけれども, さあ, 気がついたときに誰も来てくれないという状況というふうなことになる前に, ちゃんと国民的な議論, その場合, 地方自治っていうのを民主主義の学校なんていう言い方もあるけれども, まず市町村レベルで, うちはまだこれでいこうと, 外国人を受け入れてやっていこうと, でも, 北海道の東川町であったりとか, 岡山県的美作市であったりっていうところは, どんどん外国の人を入れていく。あるいは市や町が負担をして日本語学校を作るとか, あるいは外国の方をウェルカムするとか, そういうようなことを独自でやっている。そういうところがしっかりと市内の合議を経てルール化をしていって, そういうような地方がどんどん増えていく中で, 国もそういうことをやらないとだめよねっていう雰囲気が出ていけばいいなということなんですね。

難しいのは重々承知なんですけど, でも, そこをクリアしないと, 今後の人口減少には対応できないだろうというふうにみえていますので, ちょっと, あまりお答えになってないけど, そういうふうな問題意識で, 実現した市町村ではどういうふうな条例化したのか, 議会の同意形成とか, あるいはヘイト的なものへの対応とか, そういうことについていろいろお聞きして, どういうふうなことだとソフトランディングできるかなっていうことは, 今, ちょっと調べているところであるということですね。以上になります。

山本: ありがとうございます。もう1人, 2人, よければ。

男性B: (氏名)と申します。日本語教師です。僕は実

は、先生がさっきおっしゃった岡山県美作市の出身で。先生のおっしゃることもっともで、公費による日本語教育とか、まさに必要だと思うんですが、先ほどの質問とかぶるんですけれども、住民の意識とか、これが変わらない限りは政策として挙げられないと思うんです。僕はやっぱり政策と意識と両方伴わないとこういうことは変わっていかないと思うんです。だから、政策面では条例を作る場合、具体的な、あると思うんですが、それを維持する意識的なものを民意にどういうふうに働きかけていくかってことで、何かヒントのようなものがあったらお聞きしたいです。

徳田：はい、ありがとうございます。このあたりも、やっぱり民意との兼ね合いというのが、特に多文化共生推進プランって、基本的には行政内部の政策目標ということなんで、ある意味、役所内の合意が取れる場合もあるんですけれども、条例っていうとそうはいかないということですね。

それとあとは公費負担というところで言うと、やっぱりそこも限られた税金をなぜ外国の人たちに使わないといけないか、ここの説得、納得、これが避けられないというところではあると思います。

先日、静岡市でお話を聞いてきたときに、条例を作ることによってどういうふうな意味がありますかという話を質問したら、まず、うちの自治体は外国人を責任持って受け入れますというふうなことにについて、非常にわかりやすく伝えることができる。こういう条例を持っているということで、うちの市は多文化共生、積極的に外国の人たちと仲よくやっていくということをやっていますよというアピールができるというのが一つ。また、条例は市民の努力義務というのがルールとして生じるので、市民、住民に向けて、これは行政だけが言っていることじゃなくて、市民全体で取り組まないといけないですよっていう、そういうふうな働きかけ、あるい

はアピールができていくとって、これ、ニワトリと卵論争で、どっちが先になるかってあるんだけど、条例を取り付けることによって、そういうふうな効果があるということを言われました。

今、カナダの地方の共同研究を進めているんですが、私の共同研究者で、カナダの地方での人口減少がやばいと、人手がないとつぶれるというふうなところで、どうやって入れているかっていう話を聞いたときに、印象的なコメントがあったんですけど、ニューカマーの人が来てくれるとしても、やっぱり都市部に出たりとか、アメリカに逃げたりっていうことで、「フライト・リスク (flight risk)」っていうらしいんですけど、飛んでいってしまうリスクというのはどうしてもあると。だけど、われわれはニューカマーの人が入ってくれて手伝ってくれないと、われわれのコミュニティはもう滅びてしまうというようなことですね。なので、どんどんニューカマーを入れて、ちょっとでもここが好きになって残ってくれたらいいとか、逃げられるのはあるけど、逃げられたぶんは新たに来てもらうという形で回していかなければ、われわれのコミュニティはもう滅びてしまうっていう、そこまでの認識を地域に持てているっていうことですね。

そこまでトップから住民レベルまでも、やっぱり外国の人とうまくおつき合いをする、あるいは一緒に地域をつくっていくことをやらなければ、われわれもうまずいと。美作市の市長さんだと、割とそういうこともがんがんやっていって、結果はあとでついてくる的な感じで進めているんだと思うけれども、それは美作市の市民、住民からどう思われているかは別にして、そういうふうな意識でもうちょっととどンドン突っ込んでいかないと手遅れになるかもしれない。先ほどのように、もう外国人入れるしかないんだけどどうしたらいいですかと言っているのでは遅いわけですね。やは

りどこまで腹をくくれるかということです。

そういうふうなところなので、ちょっとお答えになるかわからないけど、腹のくくれた自治体さんから合意形成をしてどんどん手を打っていくというふうなことです。そのうち全国的にそういうトレンドになるので、やばいってなって、恐らく全体に流れていくんじゃないかというふうには言えるのではないかと思います。

山本:ありがとうございます。それでは、ここから、実際に山口県で多文化化に向けて活躍される3名のアクターの方にお話を頂きたいと思います。それでは初めに、岡さん、よろしくお願いいたします。

3. 持続可能な多文化共生のまちづくりのモデルに～みんなちがって、みんないい～ (岡 孝則)

3. 1. 地域における多文化共生の先駆的モデルをめざして

国際交流ひらかわの風の会の岡と申します。よろしくお願いいたします。まず、私からは、持続可能な多文化共生のまちづくりのモデルをテーマに、地域における実践事例を紹介したいと思います。ちょっと内容が多岐にわたるので、ひょっとしてまた時間をオーバーするかもわかりませんが、ご容赦願いたいと思います。

まず、自己紹介ですけど、私は山口県庁退職後は山口県国際交流協会事務局長をやっておりました。そういう関係で、多文化共生のマネジャーも一応取得しています。現職は公益財団法人河村芳邦記念青少年育成財団(略して河村財団)という、青少年の健全育成のための助成をしている団体の常務理事をやっております。それ以外にも、一応、山口県ペルー協会の副会長とか、山口スペイン・ナバラ協会理事とか、実際、ペルー、スペインはもう20年近くの関係があります。そ

ういうことで、スペイン圏とは非常に交流が深いということでございます。一応、今、山口市からは山口市日本語教育支援体制運営協議会の会長を委嘱されております。また、県からは、やまぐち多文化共生推進パートナーの委嘱を受けております。

風の会ができあがった背景でございますけど、これは私たちの風の会の拠点が山口市平川という地区でございます。市内の中心部から南西部にあるんですが、山口大学がそこにはありまして、幼稚園から大学まで、たくさんそういったものが、人口2万人なんですけど、文教地区としてあります。私どもはそこで留学生たちの、約400人、正味、昨年度455人だったんですが、それだけいる外国人と地域の人たちをつなぐことを目的に活動しております。

今から20年前、ちょうど今年で満20年になるんですけど、そのときには、地域住民から留学生によるごみの分別でトラブルが起こったり、自転車のマナー違反とか結構ありまして、私が青少年健全育成の役員をやっていた関係で、同じメンバーで気の合う3人がおりまして、このままでは子どもたち同士も非常に悪影響を起こすだろうということもあって、この3人が立ち上げたんです。この3人ははっきり言って英語ができません。英語ができないのに国際交流やるのかとよく言われるんですけど、実質的には、土地の顔役になる人が、農家の方なんですけどいらっしゃいます。また、文房具屋さんもいまして、大学とか学校関係に顔が広いということもあって、それらが同じ青少年活動やっていたということがあって、よし、じゃあ、3人で作ろうかと。ちょっとやっぱり英語できる者が要るなということで、大学の先生1人を引っ張り込んで、とりあえず会長に据えて活動しております。現在、約39名メンバーがおりまして、実働人員は実際10名程度で活動しています。

活動理念としては、1番目は地域と留学生のパイプ役を担うということで進めております。で、2番目には、日本の生活に溶け込む支援をしようということで、いろ

んな体験をしてもらおうということでやっています。次に、3番目としては、留学生のニーズをしっかりと聞いたうえで活動しようということで、留学生家族の支援を行っています。

これはやはり、留学生本人は大学に行くからいいんですが、配偶者はどうしても家に閉じこもりがちになります。その閉じこもる配偶者をどう私たちと一緒に遊べるというか、何か話ができるような形の間を作らなきゃいけないだろうということで、キッズクラブとかいうのを作りまして、キッズクラブは定期的に開催するんですが、そこで親子と、日本人も含めて一緒になって、毎月1回井戸端会議的な活動をしています。そこでいろんな悩み相談とか、いろいろ受けたりしております。次に、外国のルーツの子どもたちの生活支援ということで、日本語学習の補助なんかも行っております。また、生活面でいろんなサポートをしております。

あと具体的にはのちほどふれたいと思いますが、あとは、4番目としては、安全で安心できる生活知識と訓練ということで、防災意識の向上とか、地元民との協力なんかをできるような体制作りというのを活動として挙げております。

3. 2. 風の会の活動概要

これからは直接的な活動の概要を申し上げますが、まず、留学生たちの地域行事への参加ということで、これが活動するのに一番手取り早いというのが、地区の既存の行事、これにいかにか留学生たちを参加させるかということで、毎年4月に地区民の運動会というのがありますので、それに留学生チームを作って、毎年約100人の留学生たちが参加します。もちろん家族も参加しますが。そこで、入場行進なんかあったときに、留学生チームが入場行進すると、各地区の人たちから大きな拍手で迎えられというような感じで、非常に留学生たちに対しても受け入れ体制が高まっていると思います。初めの頃はそういうのがありません

でしたが、やはり5回10回と参加すると、もう留学生そのものが地区民になるというふうな意識が住民の人たちにも広がっているような感じを受けております。また、地区の盆踊りにも、一応、われわれが着つけの先生たちをお願いして、全員に浴衣を着つけしてもらい踊りの指導をして、盆踊りの本番では、率先して踊るので、非常に喜ばれています。また、地元漁業協同組合の協力によるあゆ祭がありまして、そこに出演させてもらったり、平川まつりには、留学生たちと焼き芋を作ったり、たこ焼きを作ったりして、チャリティバザーの参加をしています。これは、この祭りに参加するというのは、ある面では、留学生支援における資金稼ぎにもなっておりまして、そういったものを兼ねて、留学生たちと一般の住民の方々と顔をつなぐ役割もあります。



写真1. 地区運動会の様子

あとは県や市が行うようなイベントにも出店参加しております。これが運動会の状況ですね(写真1)。二人三脚とか、むかで競争。こういったものをここで体験すると、やっぱり自分の国に帰って、同じような運動会を広めようというような動きもありました。

また、こういったことは非常に、日本人というのはこういう団体活動は得意ですが、それぞれのアジア系の人たちなんかだったら、なかなか団体活動ができないんですね。こういった団体活動をやることによって、チームワークというか、そういうのがいかに大切かということが日本の文化にこういったところでもふれていくという



写真2. 盆踊りの参加者たち

で、これは盆踊りですね(写真2)。これの着つけあたりもわれわれ地域の人たちが着つけをしてくれておりまして、盆踊りの、文化講座とか農業体験、また地域住民との鮎つかみ交流、で、また山口歴史文化体験プログラム、また交通安全教室、防災セミナー、萩焼づくりなどの日本文化体験と。また学生部会も設けておりまして、学生による企画といったものも活動の中に入れておりますので、年間約40行事ぐらいをこなしています。



写真3. 早乙女衣装を着ての田植え体験

特にメインとなる農耕文化体験ですが、田植えのときには早乙女衣装を着せてもらって(写真3)、そこで、うちは音楽家もおりまして、笛や太鼓を鳴らして田植えをしたということもありました。いずれにしてもうちは地元の宮司さんの協力を得て、神事を一通りやりまして、お田植祭とかお田刈祭をやっております。そういう内容で、非常に、これも毎回百人近くの留学生たちが参加してくれております。普通ムスリムの方はこうい

う神事には参加をしないのが当たり前なんですが、五穀豊穡で、土地神様とか、日本は八百万の神がいるということを説明しながら、ここで一緒になってお祈りしようということで、神事に拍手を打ってくれております(写真4)。これは鮎つかみですね(写真5)。ここではそうめん流しを行うなど地域の子どもたちと留学生の交流活動の場となっています。



写真4. 豊穡への祈りをささげる



写真5. 鮎つかみ祭りの様子

また、外国人住民による地域住民のための文化講座ということで、一昨年はウクライナの留学生もいましたので、実際にウクライナの実情のお話や、キエフで音楽留学をしていた住民もいましたので、一緒になって演奏をしたりしました。また、西アフリカのジャンベ交流をして、アフリカ関係の留学生を巻き込んで、みんなで太鼓をたたいたといったようなこととか、毎回、4, 5回ぐらい文化講座を地域交流センターにおいて開催しております(写真6)。



写真6. 外国人住民による地域住民向け文化講座

これは、この平川地区で一番大きいのがインターナショナルランチパーティー（写真7）。これコロナできなかったんですが、また近々やりますが、これで料理と民族衣装と、そういったものと自国の歌を歌ったりして、地域の人たちを呼んで交流を図っております。それぞれの国が約30カ国ぐらいが来てくれて、このときは150人ぐらい集まりましたかね。こういった料理をみんなで食べます。地域の人たちにも大変喜ばれております。

それと、あとは留学生家族に寄り添った支援ということで、学校なりそういったところとのパイプ役であり、入学手続きとか、そういったもののサポートやら、保護者参観日には同席して、一応、通訳をしたりとか、いうこともしております。あと、銀行関係、役所関係との窓口手続きのサポート、これも通訳代わりにサポー

トしています。あと引っ越しの手伝いとか、こういったことも主にやっております。

3. 3. 留学生に寄り添った支援を

その中で一番自主活動として大きなのが、「kids club かぜ」の開設ですが、これが立ち上がって2006年だったかな、もう既に10年近くになるんですけど、ここでは一応、交流促進ということが目的で作ったんですが、やっぱり親、配偶者そのものが友達がいなくて、同じ国同士の話を、横のつながりがあるかなと思ったから意外にない、というようなこともありまして、それではいけないということで、この kids clubを通じて、一緒にゲームをしたり、歌を歌ったり、親は親で一緒に来てもらって、親同士がここで会話が生まれたり、われわれには育児だとかいろんな悩み事を、相談を受けたりとかしています。こういうふうにみんなでゲームで踊ったり歌ったりしております（写真8）。これが月に1度、地域交流センターや山口大学の学生会館を使って活動しています。

その中で、特に出産、妊娠したからということだとか、出産、どうしたらいいんだろうかという、こういう悩みが一番多くて、これまでに30事例以上出産の立ち会いをいたしました。男は何をするかという、送迎をしたりとか、そういった形で手伝っていますが、う



写真7. インターナショナルランチパーティーの参加者たち



写真8. kids club かぜ 活動の様子

ちのメンバーの中には、看護師さんもいますので、いろんな面でサポートできまして、日赤と、一応連携が取れるようにしております。非常にそういった面では、留学生の配偶者の皆さんから喜ばれております。

その延長で kids club にハノイ支部ができまして、山口大学の元留学生にハノイ農科大学の先生が結構いらっしゃって、それとそこ子どもたちと、またその周りの子どもたちと、こちらの kids club の子どもたちが Skype を使って、向こうは日本語の勉強をしたいから日本語でしゃべる、こっちは英語をしゃべりたいから英語をしゃべるというような形ですけど、お互い歌を歌ったりとかいう形で、今は子どもたちもこちら日本に来てくれましたし、私たちがハノイのほうに訪問して、こういう例えばこいのぼりやら短冊、盆踊り、餅つきなんかもやったりして、これはベトナムの国営放送にも配信されました(写真9)。



写真9. ハノイ kids club 交流の様子

あとはこういった引っ越しの手伝い、9月になると

引っ越しやらが大変多くなりますので、こういうサポート、それと、これはエピソードなんですが、風の会の活動をしている主婦の人たちが、自分たちでできた野菜を持ち寄って朝市を作っています。そこにバン格拉デシュの奥さんが来られて、倉庫の中で、ごみ箱の中にかぼちゃの花がたくさん捨ててあったと。これを見て、そのバン格拉デシュの奥さんが、これはバン格拉では貴重な高級食材ですということで、みんな持ち帰ってもいいよって言われたんで、持ち帰ってそのあとすぐ、それを天ぷらにして持ってこられてですね、それを皆で食べたらとてもおいしくて、感動されて、それからそのおばちゃんたちとバン格拉デシュの人たちとの交流が始まって、一種の井戸端会議的な場所になりました(写真10)。お互いに料理教室をやったり、広島原爆ドームに行きたいとバン格拉デシュの方が言うからそれに連れていったりとか、最後は福岡空港まで見送りに行ったとか、民族衣装をプレゼントしてもらったとか、そういう交流活動が展開されました。



写真10. かぼちゃの花から交流が始まる

今はどうなっているかというと、今は実は若い学生たちが地域のこども食堂と同じような感じで、年寄りの人がここに来るんですね。そこにご飯を炊いて、めしと汁を作って、若い学生たちが食べさせてくれていると。その食べさせる食材は、主婦のおばちゃんたちが提供してくれるというような形で朝市は活動しています。

これはアフガニスタンの元山大の留学生が、アフガニスタン政変のときに私のほうに SOS が入りましたので、何とか助けてくれということだったんで、皆で役員会議開いて何とか助けようということで、クラウドファンディングとか、いろいろ募金活動して、約 200 万円以上資金を集めて向こうへ送金して、そして外務省との交渉を私が全部やりましたけど、外務省説得して、便宜を図ってもらった中でパキスタン経由で日本に入ることができました。今はどうしているかというと、県内に住んでおりまして、英語の教室といたしますか、そういうようなものをやったりして生活しておりますが、非常に安定した生活をしておりますので、子どもが 4 人いるんですけど、実際その子どもたちの日本語能力というのはまだまだ今教えているところでございますが、まあ、今、頑張っているところでございます。これは募金活動している状況で、地域の人たちも手伝ってくれました（写真 11）。



写真 11. 元留学生家族のための街頭募金活動

3. 4. 住みよさ日本一の平川地区を～ひらかわモデルの構築～

風の会として、今の問題は、これからは課題についてチャレンジしようということで、一番最初に平川小学校の日本語教員、担当教員から、今 10 カ国 20 人ぐらいの子どもが平川小学校に在籍しています。

それを受け入れるのに、4 月の入学式のときに、3 年前の 4 月に、入学式のときに先生からうちの風の会の

事務局長に相談があつて、もう自分たちでは手に負えないぐらい学校は大変な状況ですと。地域の人たちにその辺を助けてもらうことできないだろうかという相談がありまして、平川には日本語教室もありますし、いろんな面で風の会もいろんなネットワークがありますので、じゃあ、もうちょっと幅広いネットワークを作って、みんなで助け合いましょうということで、まず私が勤務していた県の国際交流協会に呼びかけたり、あと山口大学が当然やらなきゃいけないので、山口大学の学生支援部長に言って参加してもらったり、留学生センターもありますので、そういった形で入ってもらったりして。

あと一番の狙いは、市教育委員会にその実態を知ってもらうのが一番じゃないかということで、市教育委員会に最初はオブザーバーで参加して頂きました。そういったことで非常に自分たちの団体ができること、できないことを全部アンケートを取って、それで出合合って、やれることからやりましょうよということで会議を進めておりましたら、非常に効果があったといえますか、そういった面で外国人児童に対する日本語教育の問題点というのもわかってきたし、生活能力などの問題など課題が山積みだということもわかったので、その課題解決のためにはそういった団体のできることからやろうではないかということで始めました。

それがここの次の、ひらかわモデルというのを作りましたが（図 1）、それぞれの団体がやれることを一応事細かく書いているんですが、われわれは英語ができませんので、ポケトークで話をしておりますが、そういうようなできることをこのひらかわモデル等で作っていきまして、ネットワークをまず構築したこと。

それから今年度は市教委を、逆に発展的に、今までは民間主導でやっていましたけれども、それを今年度は市教委主導にしていって。今の運営協議会という名前にも変えまして、今年度。それを市教委の学校教育の中に事務局を置いたということで、市教委も何とかせにゃいけないという実態を理解していただけたと

アフリカ・アジア・ヨーロッパの子どもと関わりあえる

ひらかわモデル

「ひらかわモデル」とは、外国にルーツを持つ子どもたちが安心して学習し生活していけるよう、多様なステークホルダーが連携し、協働してサポートする支援体制のことです。関係者は約3か月に1回のペースで課題の共有や検討を行っており、「ひらかわモデル」も年度、必要な形へと進化していきます。子どもたちの未来を一緒に考えたい方、一緒に手を取り合っていきませんか？いつでもご連絡ください。

このモデル図の読み方

● NPO ● 行政
● 教育機関 ● 外国ルーツの子ども保護者

小学校 緑色の色
＝関係者の属性

地域 黄色の色
＝支援の場所

その他地域 緑色の色
＝支援の場所

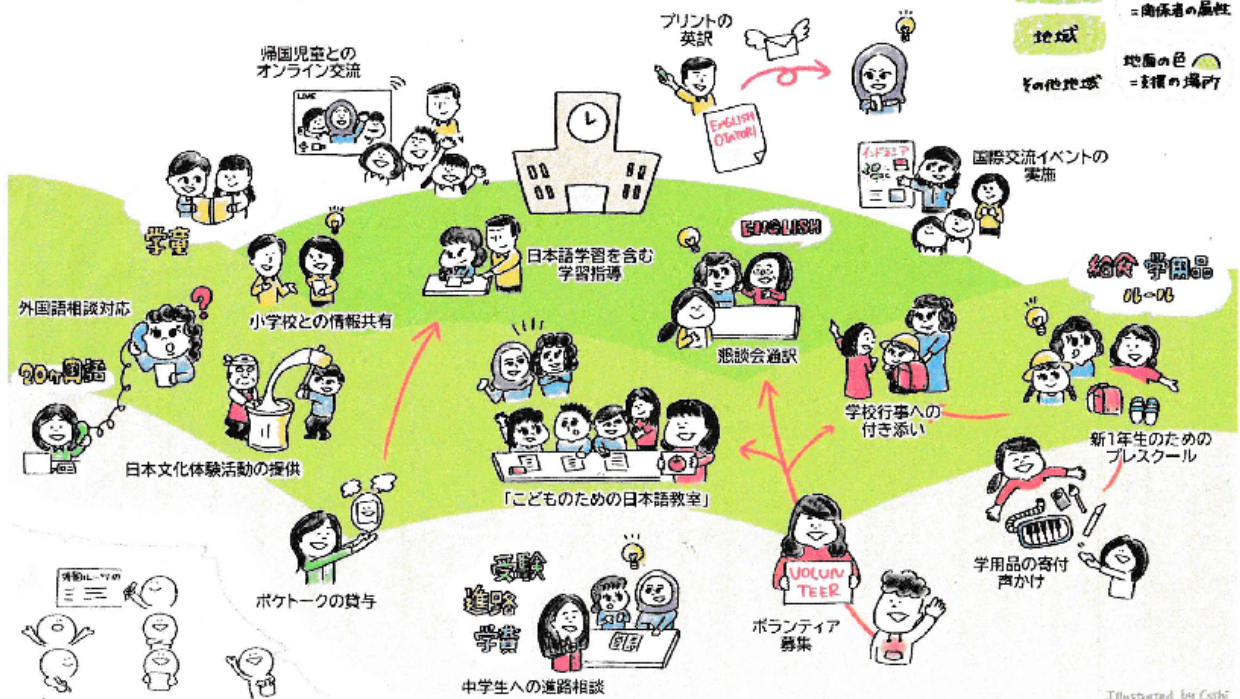


図1. 外国ルーツのこどもの支援をめぐるひらかわモデル

思いました。これらのやっている内容を元にして、日本語の補助教員の要望とかそういったのを具体的にできるようになっていったというのが、一つの成果ではないかと思っています。

具体的に平川小学校も担当教員が非常にやる気のある満々の人でして、非常に頑張っておりまして、ここに書いてある先生ですが、彼も学校長を辞めて、退職でここに嘱託でおるわけですが、もともと国際協力の専門の方でした。彼が平川小学校に国際教室を作っております。

今、一番力を入れているのは大学との連携です。この中には、この大学との連携によっていろんな形ができていったということをご理解して頂けます。特に青少年海外協力隊山口県 OB 会の方々の日本語教育の実施と、プレスクールもやってもらっておりますし、高校進学相談なんかもやってもらっております。非常に先駆的な活動をされていらっしゃる。そういった面で、

平川が本当にいい意味でメンバーがそろったというか、団体がそろったということだろうと思います。もし何かありましたらまたご相談頂ければいつでもお答えいたします。よろしくどうぞ、ありがとうございました。

山本：ありがとうございました。多岐にわたってご報告をありがとうございました。このまま一旦色々とお聞きしたいところなんですけど、大田ナムさん、よろしくお願いいたします。

4. 外国人から見る多文化共生(大田 ナム)

4. 1. 自己紹介

改めまして、私、大田ナムと申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。ベトナム国籍で約10年前から日本に、この山口に来たんですけど、大好きですね、山口県。何が大好きかというと自然が大好きです。

ね。私、ハノイ出身なんですけど、ハノイって多分ご存じの方もいらっしゃるかと思いますけど、思ったより都会ですよ。高いビルばかりじゃないですけど、めっちゃくちゃ都会で私の生活の中にも本当にコンクリートの建物ばかりで、山口に来て初めて思ったの、山が多いなと思いました。その自然の中で、約10年住んでおまして、いろんな意味で山口に人を呼ぼうって言って、また山口に私みたいな外国の方、たくさん来て頂けたらいいなと思って、今、いろんなことをやっております。

本日お話しする内容は主に三つございます。1が自己紹介、2が多文化共生とかかわる活動。この1と2はほぼ自慢話ばかりです。3番が一番メインの内容になります、外国人の私から見る多文化共生のことですね。感じることを皆さんにお伝えしたいと思います。

さっそく自己紹介から入らせて頂きます。この大田という名字ですが、妻が日本人なのでこの名字を借りて、今、生活しております。32歳です。この32歳は覚えておいてください。なぜかという今今のベトナムの平均年齢なんです。ベトナム、ハノイ出身でございまして、10年目になっております、山口に住んでから。妻とそれから4歳の娘、3人家族で今、暮らしていますが、これよく考えたら多文化共生なんですよ、家族内では。私はここで多文化共生についていろいろしゃべりますが、家では何も言えない。妻が言うことを聞く、従う、それだけです。冗談ではありますけど、いろんな意味で多文化共生でぶつけ合って、それでも楽しくやっております。

経歴です。一番最初に山口短期大学という山口県の防府市にある小さい大学に留学生として来まして、そのあと長門市にある大谷山荘という旅館で接客をしました。そのあといろいろ通訳だったりやっておりました。2022年、約3年前です。下関で独立して、主にバインミー専門店、ベトナム料理です。それからキッチンカー、また輸入輸出いろいろやっております。山口県が多文化共生推進パートナー、岡さん

と同様でお仕事しております。また去年、山口多文化共生推進指針（山口県、2023）の策定で、外国人代表として委員にも選ばれました。

4. 2. 多文化共生と関わる活動について

続きまして、多文化共生とかかわる活動。まずこの活動する前に、今、山口県に約4,000人のベトナム人がいます。外国人全体見ますと2万人ぐらいいますが、ベトナム人だけ見ますと約4,000人、5人の中に1人がベトナム人ということですね。これが1位になりました。また私が住んでいる下関には約1,000人います。2位となっておりますが、歴史背景もあって、在日コリアンの方が一番多かったんで、その方もほぼほぼ日本生まれで、日本語も流暢ですし、その方を省いたら、次はベトナム人になります。

特徴を見ますと、この4,000人のうち、半分以上が実習生、現場で、工場とかでよく見かける実習生などですね。また私がベトナム料理をやっているのもありますので、ベトナムのお客さんがとても多いです。常にその方からの相談だったり、困り事を聞いておりますので、現場をよく知っていますということです。

また私が山口に来たときに、もっといろんなベトナム人の方と交流をしたいと思っていて、Facebook、山口県に住んでるベトナム人¹の会というのを作ったんですけど、最初は30人ぐらいのグループだったんですけど、今は約、何名ぐらいだろう。3,000人ぐらいいまして、ほぼここに住んでるベトナム人がこのグループに入っていますということです。このグループに防災情報だったり、イベントの情報があったり、相談などいろいろ載せております。

また多文化共生パートナーとして、行政に外国人の困り事、外国人が期待することをお伝えしていることもやっています。また、実習生の通訳であったり法廷の

1 <https://facebook.com/groups/vietnamyamaguchi/>

通訳、この間、捕まったベトナムの子が日本語できなかったの、検察庁に言われて、検察庁ですごく緊張しながら通訳しました。とても大事なお仕事ですので、一つだけ間違ったら、その人の人生変わっちゃう可能性がありますから。

それから、プライベートで言いますと、バドミントンチームを作っておりまして、そのバドミントンチームの中に半分がベトナム人、半分が日本人っていう、すごく交流もしやすい場になっております。またお店やっておりますので、定期的にベトナム料理教室もやっております。

4. 3. 外国人の私から見た「多文化共生」

では本題に入りますけど、外国人の私から見ると多文化共生ですね。まず私が住んでいる下関なんですけど、同じセミナー、シンポジウム先月出ましたが、その主催が下関の国際課なんです。で、その話題が今度、外国人に選ばれる下関を目指そうみたいな話題で、また先月も山口県の知事、村岡知事がベトナム、ハノイを訪問して、ベトナム政府と会って、もっとベトナムの労働者を受け入れたいと申し上げました。

これが面白くて、約10年前、逆の立場でベトナム政府が日本に足を運んで、ベトナム人を受け入れてくださいという立場なんですけど、今回逆なんです。日本からわざわざ世界に出て、ぜひ労働者をくださいという立場なんです。で、すごく人口減少というか、すごく人手が足りないという条件は私も感じております。

で、じゃあもっとここに来てもらおう、もちろんここに住んでいる方も住み続けてもらうためには何をしたらいいのかっていうと、まず現場の状況を把握しないと手を打てないので、この現場は情報が不足。いろんな外国人がいますけど、その方々に情報が届いてないのがまず現状ですね。例えば子どもを持っている家庭のベトナム人の女性から相談受けました。4月から保育園を行かしたいんですけど、市役所に問い合

わせしたらもう埋まっています。なぜかっていうと、4月に通うために10月から申請しないと通えないんですよ。半年前から申請しないと通えないです。でも、僕らの国だと4月から行くなら3月に申請みたいな感覚です。で、誰も知らないんですよ。10月の申請が過ぎたら簡単に入れなくて、待つ、順番になりますので待たないといけない。でも、たくさん子どもを作りたい日本が、子どもが保育園に簡単に行けない。それがすごく不思議やと思って、もっとそういう子作りの、子育ての方々に役に立つ支援策を作ってほしいなと思います。そういう情報不足が現場ですね。

で、もちろん言葉の壁もありますけど、いろいろ、日本語教室あちこちでやっていますが、その辺で言いますと僕、あんまりそこまで評価をしないんですよ。なぜかっていうと、よく考えたら日本語教室って、もちろん外国の方のためでもありますけど、どっちかっていうと僕の個人的に言えば、日本人の方のためになんです。日本語で会話するから日本語、外国人に勉強してください。でもこっちはそんなに日本語勉強しても給料そんなに上がらないし、もちろん目に見えるメリットいっぱいありますけど、よくよく考えたらもっと違うところに投資したほうがいいんじゃないかなと、外国人の方は多分思っています。だったら日本語教室じゃなくて、街中の看板を英語にしましょうとか、ベトナム語にしましょうとか。下関では日本語の表示と英語の表示、それから韓国語の表示もありますね。それが今度ベトナム語で書いてくれたら僕の友達いっぱい来ますよ、下関に。そうやって、全部変えるのはもちろん限界はありますが、例えば観光地とかそういう外国の人がよく行く場所だけでもスタートしてもいいかもしれないですね。

それから、実習生の皆さんスマホは持っていますけど、ほとんどの方は契約してないですね。なのでWi-Fiのみの使用になっています。外に行ったら大体通じないですね。ですので、もし下関だったら山口県が、そういう公共のWi-Fiがあればいいなと僕は

思っています。広いですから、日本。ほかの国も、例えばベトナムだったらこの喫茶店でも Wi-Fi つながっています。日本はそういうことはまだないです。

また、皆さんのかかわっていると思いますのが、多文化共生ってよく聞きますけど、外国の方ってあんまり多文化共生に関心がないですよ。目に見える賃金だったりアパートだったりしか関心がないというか、そんなに余裕もないですから。それから防災についてですけど、まず外国人の方、あんまり危機感を持ってない。地震の体験をしたこともないですし、津波もそうですし。あと山口、比較的災害が少ないので、危機感を持ってないのはとても危ないんですけど、定期的な訓練が必要です。

また、今ベトナム人が数増えまして、一番になりますけど、ただ僕で、ベトナム人はすごく減っています。昔、約2年前、駅の前だったり観光の場所の前とかよくベトナム人が、自転車の走っている姿よく見かけますけど、最近本当に少ないです。僕のお店にも来るお客さんも減っていますし。なぜかという、先ほど徳田先生のお話の中にもありましたけど、日本での魅力がもう少なくなるというか、韓国へ行ったりヨーロッパへ行ったりする方が多くて。また山口ではなくて、山口で3年間実習生終わったら、じゃあ今度東京行くとか大阪行くとか、そういう都会への流出、またベトナムっていう国はすごく速いスピードで経済が発展していますから、わざわざ外行かなくても国では稼げるっていうこともあります。

じゃあ長期的にベトナム人の方だったり外国の方がこの山口に住み続けるには何が必要といいますと、先ほど言ったように、子ども、家族滞在の方々の言語サポートだったり。また、もっとオープンな日本に住みたいですよ。例えば昔、吉田松陰先生がアメリカの船に乗って、アメリカに連れていってくれのこと僕すごく印象的だったんですけど、もっと腹をくくって、外国人いっぱい来てもいいよ、ウェルカムですから、そういう閉鎖的な国ではなくて、もっとオープンな日本、それが、

日本人の一人一人が意識が変わったり、また上の立場じゃなくて、よく企業とかで言うと、社長がもうベトナム人雇ってあげるよみたいな感覚じゃなくて、受け入れですから、ともにこの山口県を盛り上げる、ともにこの社会を作っていくっていう意識が僕はとても大事だと思います。

また、僕らの期待は2世へのサポートだったり、あと、僕もベトナム料理やっていますので、もっと楽しいイベント、もちろん日本語教室、防災関連とかもとても大事ですけど、もっと楽しいイベントが、例えば僕だったらバトミントンだったりベトナムフェスだったり、そういう誰でも参加できるイベント。外国人を巻き込めるイベントがとても魅力ですので、それでこの山口を選ぶことにもなりますし、もっと楽しい山口に住みたいと思っています。

また、とても交通が便利ではない山口なので、観光の面で言うと、観光バスだったり、それから、これから長期滞在の方向けの、運転がサポートが必要になる可能性が高いので、自動車学校でのベトナム語での教育っていうか。一人だけ通訳さん雇ったらいので、わざわざ静岡まで免許を取りに行く必要もないので、ここで、ベトナム語で受講できる学校はとも必要になってくると思います。すいません、ちょっとまともにしゃべってないんですけど以上になります。ありがとうございました。

山本：大田ナムさん、ありがとうございました。それでは最後になりますが、権代さんよろしく願いいたします。

5. 濃い人間関係の復活を期待して(権代 祥一)

5. 1. 自己紹介を兼ねて

こんにちは。権代祥一と申します。今は防府市の牟礼地域自治会連合会の会長をやっておりまして、その

牟礼地域の浮野自治会というところの会長でもあります。自己紹介させていただきます。私はもともとシステムエンジニアをやっておりまして、しくじったら新聞ネタになるようなちょっとでかいシステムばかりをやっていました。そんな環境で精神的にいろいろと病んだりもしました。そして、逃げるように青年海外協力隊としてフィリピンに行った後、ベトナムに8年ほどいました。ベトナムではハノイ工科大学というところでIT系の模擬プロジェクトを通して、ヒューマンスキル系の講座などをやっていました。今、私の教え子達は日本で起業している者も増えてきました。そんな彼らの事業のサポートなどもいろいろとやっております。

さて、私は小学校の頃、図鑑が大好きな子どもで、SF小説にすごく夢中になったんです。で、理科だけが得意で体育は非常に苦手っていうよくあるパターンの子供ですね。で、他の教科はそこそこ。中の中の下ぐらいの成績でした。コミュニケーションが苦手で、今で言うオタクっていうんですかね、まあ、そんな少年でした。

そして、人間関係を円滑に結べない不器用な子どもでした。不器用なので集団に、輪に入れなくていつも孤立しているような感じなんですけれど、ただ、寂しさなどは感じませんでした。変な人間だっていうのは一応自分でも自覚はしていたんですが、自分がどういう人間なんだろうといろいろと心理学の本で独習しながら、自分について振り返ると、ASD、アスペルガースペクトラム系の疑いやADHD、注意欠乏の多動性や、自己愛性も若干あるんじゃないかなっていう傾向が見えて、そういう認識をしました。就職して、人間関係にもいろいろと問題を抱えやすい傾向が見られて、やっぱり自分を変えなきゃいけないというふうに思いました。そこで少し強迫性も入っちゃったのかもしれませんが。そして、自分を変えていこうとこの頃に決意しました。就職したのがシステムエンジニアの会社です。

この当時は今で言うブラックな状況でもう本当大変でした。で、私はとにかく電話対応が下手でお客さん

を怒らせてしまって、上司呼べとかって言われて、すいませんって言いながら、もう毎回電話口で頭下げるような、そんな失敗をずっとしていました。プレゼンも凄く下手で、今ここで登壇するようなことは恐らくできなかったと思います。ただ、好きなことは凄くしゃべれるんですね。なので、何かオタク系なんだろうと感じていました。それから、結婚したときに奥さんからヒューマンスキルの本質っていうものを習ったようなところがあって、非常に奥さんには感謝しています。ただ、いろいろなボタンのかけ違いで別れてしまいまして本当に申し訳ないなと思っております。まあとにかく、結婚してからやっと社会人になったかなという実感がわきました。それから父親になって、親としてどうあるべきなのかっていうところで、いろんなヒューマンスキル系の本を勉強しました。

ただ、就職先が本当にひどいときは残業250時間という仕事をしていました。250時間ってわかります？100時間以上ですよ。残業250時間ですから、1カ月に420時間ぐらい働いているんですよ。そういう状況が8カ月も続くともうわけがわからない状態になって。そして、しくじったら本当に新聞ネタになるので、いつもプレッシャーと闘いながら仕事をしていたら、燃え尽き症候群になりました。これはある種のうつ病なんですけれども、たまたま『日経コンピュータ』っていう雑誌の特集で、燃え尽き症候群の特集が出てまして、チェックリストがあってチェックしたら、全部チェックできたんですよ。えっ、自分は燃え尽き症候群だったのかとわかって、もう愕然としました。この状態が定年まで25年くらい続くことを考えたら、ぞっとしちゃって、とても続けられないと思いました。それで会社を本当に辞めたいと思っていました。

そのときに、たまたまある官庁さんの仕事をしていて、そこでその官庁さんの担当者と国際会議に出ることになりました。しかも開発したシステムを英語で説明しろと言われて、英語もできないのに国際会議で一応プレゼンさせていただきました。そんな縁があって、会議

場でたまたま知り合ったインドネシアの代表の方と片言の英語でしゃべっていたら、インドネシアのシステムっていうのは青年海外協力隊で作ったんだっていう話になりました。で、帰国してすぐに協力隊の応募をしました。その時は奥さんにもちゃんと了解を得ていたはずだったんですが、いざ合格してしまったら奥さんが猛反対し始めて、ほころびが生じてしまったのですが、それでも協力隊に行くことになりました。

5. 2. 青年海外協力隊への参加

そして、青年海外協力隊として、南レイテ州立大学という、フィリピンのレイテ島にある大学に配属されました。レイテ島は戦争の激戦地で、反日の強い所でしたが、私が行ったときは親日になっていました。ただ、時々、自分の両親は日本人に殺されたんだっていう人がすごい血相を変えて来ることがあったんですけど、私は人を殺したことないですよ。私は日本人だけど人殺したことないですよと、一応いつも言い訳をしながら何とかやり過ごしていました。とにかく、このレイテ島、すごく濃い人間関係でした。これが本当に強烈な印象で、日本にはないような、そんな濃い人間関係を結んでいるんです。このとき、濃い人間関係っていいなと思いました。

ただ、私は先進国から来ていて、この国を技術でとことん変えてやるぐらいの気持ちだったのでも、何か上から目線でした。それでなかなかいい人間関係が築けませんでした。それでも受け入れてくれる人はちゃんと受け入れてくれて、自分はコミュニティの中で何とか生活ができていたんです。そういうフィリピン人の懐の深さというか寛容さというのは、ものすごく感銘を受けました。

当時、私はゲストハウスに住んでたんですが、全くプライバシーがないんですね。で、自分が例えばいつ起きて、いつ寝たかとか、何を食べたかも知られていて、もう本当にプライバシーがありませんでした。誰と

会った、どこに行ったとか、そういうのがうわさで広まって、私の行動は全部筒抜け状態でした。ただ、関心が持たれないよりはよかったと思いました。もしも、無関心だったら、要はしらっとして、どこに行っても挨拶はされないしという感じだったかと思いますが、私が道を歩いてたら誰もが挨拶してくれて、非常にいい感じだったと今では思います。

現在は、日本で、道を歩いていても、私は自治会長なのでみんな私の顔を知っているはずなのに誰も挨拶してくれないんですよ。それって何か希薄な感じがします。だからフィリピンと日本ってこんなに違うのかなっていうぐらい文化の違いを感じています。

あと、私、英語が全く苦手で、英語ができないのに何で協力隊に行ったんだっていう話になるんですけども、その当時の英語の先生がイギリス人の先生で、この英語の先生がものすごい面白い教え方をしてくれました。文法どうでもいいからとにかくしゃべれっていうふうに言われて、とにかく言葉を並べるだけでいいから何かしゃべれよって言われました。ちなみに、訓練所に入ったら各人の英語のレベルでクラス分けをされるんです。一番上から下までグレードで分けられて、私は一番最下位のクラスだったんです。最初そのクラスに入ったときは、冠詞の a とか the から勉強を始めて、こんなところから始めなきゃいけないぐらい自分は英語がだめなんだと思い知らされました。そのときの英語の先生はすごい先生で、とにかく知っている単語並べれば通じるんだからどんどんしゃべれっていうふうに言われて、もう文法無視でとにかくしゃべって、おまえの言いたいことはわかるぞって言われて、どんどん行けて言われました。

それでちょっと自信を持って、現地に行ったんですけども、言葉って結局、文法の正確さよりも意味の正確さのほうが大事なんじゃないかっていうところに気がついて、ちょっと気を取り直して、もう私は英語はできないって開き直って、フィリピンではコミュニケーションが何とかうまくいきました。だから今でもあんまり英

語はできません。というか、もう忘れてしまいましたね、使ってないんで。

で、ベトナムに行ったときは、ベトナム語ができないんですけど、やっぱりベトナム語の知っている単語でつなげれば何とか通じてしまうんです。だから本当に日本語の文法だけでもだらだらと何となく言っていれば、何となく通じていました。このベトナムで日本語教師やってくれないかという話がきて、2年ほどやらせてもらったんですけども、私は日本語を教えない日本語教師をやっていました。何をやったかっていうと、ジェスチャーゲーム。これをして、ボディランゲージでとにかく意思を伝えろっていうふうなことをやったら学生からめっちゃめっちゃ受けて、もっとやってくださいっていう感じでそれは非常に受けました。なので、日本語を教えない日本語教師ということになりました。

さて、ベトナムに行ったときに思ったのは、フィリピンで私が本当に失敗したのは、人間関係の構築に失敗したということです。全く謙虚さっていうのがなくて、上から目線だった、軽視してた、傲慢だったっていうことでした。やっぱり謙虚さは絶対に必要なんでっていうことがそのときにわかりました。だから人間関係に必要なのは謙虚さしかないなっていうふうに感じて、ベトナムではもう謙虚さを全面に出して、そういう態度で臨んでいきました。それで、ベトナムではいい人間関係が構築できたかな、と感じています。

5. 3. 希薄な人間関係と理想的なコミュニティ

さて、フィリピンではものすごく濃い人間関係の中で生活していたんですけど、東京に戻ってきたら、何か希薄な人間関係だなというのが如実にわかって、すごく物足りなさを感じたんですよ。私はマンションに住んでいましたが、イベントは少ないし、当時、マンションの理事長になったこともありましたが、総会でもほとんど誰も出席しない状態で、挨拶もほとんどないような状況でした。もう本当に希薄な人間関係でした。

で、防犯の不安というのがつきまとうわけですが、実際に窃盗事件など起きたりしました。そういう犯罪抑止のために実際に防犯カメラつけようっていう話にもなったんですけど、こないだある自治会長さんいいこと言っていて、防犯っていうのは壁や塀では防げないと。住民の視線で防げるんだっていうふうな話をされて、なるほどなあ、本当にそうだなって思いました。しかし、希薄な人間関係の中では、やっぱり防犯は難しいと感じています。で、希薄な人間関係でも、東京っていうところは本当に日常生活に全然支障はないんですよ。だけどやっぱり物足りなさは感じるというところはあります。

では、困ったときに、隣の人と助け合いができるのか？ 今私は地方に戻っていて、山口県の防府市というところに住んでいますが、近所の人たちとどれぐらい協力ができるのかと考えたときに、ほとんど協力ができていません。ただ、私こないだコロナになったときに、近所の人が結構助けてくれて、大変だろうとって、食事を運んでくれたりとかいろいろしてもらったのが本当に助かりました。東京では多分あり得なかっただろうと思いますが、都市部はそんな希薄な関係ですよ。

それを語るうえで、これは内閣府が2010年に調査した比較（内閣府、2010）がありまして、これは高齢者の生活と意識に関する国際比較です、例えば別居の子どもたちと1週間に1回以上会っているかどうかっていったら、アメリカ、スウェーデンっていうのは非常に高いんですけど、日本はその半分ぐらいなんです。そして、これは相談し合う親しい友人がいるかどうかっていうところでも日本は低いです。電話で家族や友人などと連絡を取っているかっていったら、やっぱり日本っていうのは非常にほかの国に比べて低いというふうな結果が出ています。病気のときに近所の人と助け合うかどうかっていうところなんですけど、これはもう本当に日本は低くて、アメリカもスウェーデンも低いんですけど、その約半分ぐらいにしか助け

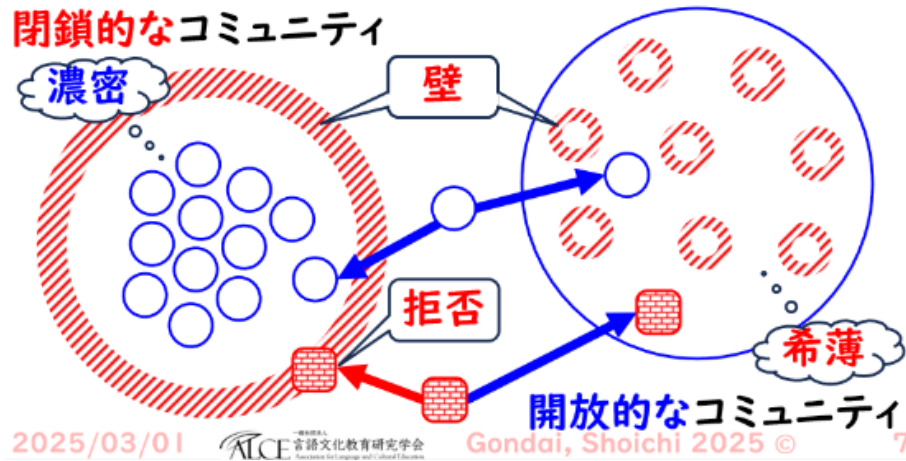


図1. 地域コミュニティと人間関係のイメージ

合っていないというふうなことです。とにかく日本人っていうのは人間関係が希薄になる傾向にあるんじゃないかと。

で、こういう状態で近助、共助、災害のときにこういうお互いの助け合いができるのかどうかっていうところが非常に危惧されています。で、今、実際私も自治会長やっていて、住民の希薄な人間関係っていうのが、本当に防災というか、有事のときにどれぐらい発揮できるのかっていうのは非常に危惧される場所ではあります。

で、地域コミュニティに溶け込むっていうことをちょっといろいろ考えているんですけども、これ、左側のほうは濃密な人間関係です（図1）。で、壁があります。で、右のほうはちょっと都会型って考えてもいいかもしれないんですけど、希薄なんですね。ただし、個人個人が壁を持っているからなかなかうまく濃密な関係を築けないというふうな状態なのかなと感じているところがあります。だから開放的なんだけど濃密じゃない、希薄だということですね。だから、誰でも入れるけど濃密な関係は築けないっていう状態です。右のほうですね。で、左のほうは、濃密なんだけど全体的に壁があるので、新参加者がなかなか入り込めないかなっていうふうな状況なのかなっていうところがありますね。

だから、例えばこれ、器用な人間、不器用じゃない人間ですね、コミュニケーション能力が高いとか、傲

慢じゃないとか、謙虚さがあるっていう人は、恐らくどういところで多分溶け込めるだろうと思うんですけども。これは例えば昔の不器用な私ですね。こういう人間が希薄なところ、例えば東京なんかでも恐らく入り込めるでしょうから、これがこういう濃密な関係のところに行くと、拒否されて入れないというふうなことになるのかなという感じですね。

で、相手の価値観を理解する、理解しないというのがあると思うんですけど、昔の自分、不器用な人間、不器用な私っていうのは、恐らく相手から理解されません。なので、理解されないから軽視されるっていうふうな状態だったと思うんですけど、この人間関係を築くためには相手の価値観を理解しようっていうふうな姿勢が絶対必要だと思うんですね。理解できなくても理解しようとする姿勢、これが結局良好な人間関係を築くんだろうなというふうに感じるんですが。ここで理解できないからあきらめて軽視し始めると、これ人間関係が破綻するなっていうのもいろんなところで見ました。

それで、理想的なコミュニティっていうことを考えると、こういう濃密な関係性のようなところが理想なんでしょうけれども、こういうところだったら、こういう不器用な人でも何とか受け入れてもらえる。で、密なコミュニケーションがうまくできるような状態になればいいんですけど。で、防犯のための厳しい目もちろんありますが、悪を拒絶するという形ですね。で、防犯で

近助、共助ができる。あと、相手の価値観を理解する努力がされている。こんなのがあれば恐らく理想的なコミュニティになるんだろうなというふうに感じています。

ただ、やっぱり世帯間の問題というのは、自治会長やってて本当いろんな苦情を受けつけるんですね。こんなに理想的なコミュニティってなかなかないです。できません。なかなか難しいと思います。やっぱり必ず隣同士でトラブルとかいろいろ抱えていて、問題がないところって本当はないですね。なのでなかなか難しいなっているのはありますが、ちょっとこれで理想的なコミュニティができればいいなと思っています。

5. 4. 濃い人間関係をめざして

希薄な人間関係になっていく背景っていうのはいろいろあると思うんですけど、忙しい生活、私みたいに250時間残業していると、とてもじゃないけど家に帰って近所の人と人間関係を結ぼうっていう気持ちにはならないですね。

あと、核家族化とかいろんな条件があるとは思いますが、あと社会保障制度が充実しているから一人で生きていけるっていうことですね。昔は助け合って生きてたところが、それがなくなっても生活できるので、希薄になっても大丈夫かっていうふうなところですかね。で、一応、私、自治会長になって、何でこう希薄なのかっていったら、やっぱコミュニケーション足りないんだろうなっていうふうに思って。夏祭りでいろんな、お互いにコミュニケーションを取り合えるような、そんな仕組みをいろいろ作ろうと思って、夏祭りの中でいろんなゲームを提案したりとかしてたんですけども、なかなかやっぱりいい、濃いコミュニケーションっていうか、濃い人間関係になかなかなりにくいっていうのがありまして。

で、そんなことをいろいろ何かないかなって探してたときに、こないだちょっとあるセミナーで、静岡県裾

野市から小田圭介さんという方がいらっしゃって(??小田, 2025??)。で、何にもしない合宿っていうのを提案されてたんです。これちょっとすごい面白いなと思ってですね。で、これ何するかっていったら、何するかって何もしないんですけど、毎月公民館に集まって、何もしないでただ1泊するだけっていう、そういう合宿をやっているんです。結局それをやることによって、住民間のコミュニケーションが非常に濃くなって、いい人間関係築けたっていう話を聞いたんで、来年度からうちの自治会でもやってみようと思って、現在、提案しているところです。これから実際に試してみて、これから結果が出ると思うんですけど、他の自治会でも一応やっていて、ある程度結果が出ているみたいで、いいなと思っています。そういうわけで来年度からこれを提案します、実は今日夕方から自治会長会議があるんですけども、そこでもこれを提案しようと画策しています。

ということで、すいません。駆け足で話をしました。ご清聴ありがとうございました。

文献

石井雅章, 陣内雄次, 村山史世, 長岡素彦 (2019). 若者の学びが創出するローカル・ガバナンスの可能性『関係性の教育学』18(1), 51-70. https://doi.org/10.51077/epajournal.18.1_51

小田圭介 (2025, 1月25日). 「教育」による地域づくりの土台づくり」[講義] 山口県教育委員会地域連携教育再加速フォーラム『笑顔でつながる未来へつなげる』, 山口県セミナーパーク.

木下大資 (2024, 10月16日). 韓国の移民政策～地域特化型ビザ『note』. <https://note.com/skydogwalker/n/n82296a480bc1>

徳田剛 (2019). 渡戸一郎編集代表『変容する国際移住のリアリティSerif「編入モード」の社会学』(ハーベスト社 2017年) [書評]『地域社会学』

会年報』31, 84-85. https://doi.org/10.20737/jarcs.31.0_84

徳田剛 (2023). 地域社会の多国籍化・多文化化対応におけるローカルガバナンス構造. 徳田剛, 二階堂裕子, 魁生由美子 (編) 『地方発 多文化共生のしくみづくり』 (pp. 18-24) 晃洋書房.

徳田剛 (2025). 外国人受け入れにおける「ローカル・ガバナンス構造」と地方部での課題——地域日本語教室が果たす役割と存在意義に着目しつつ『言語文化教育研究学会第11回年次大会「ローカル・ガバナンスと言語文化教育」予稿集』 (pp. 19-24) 言語文化教育研究学会. <https://alce.jp/annual/2024/proc.pdf>

徳田剛, 二階堂裕子, 魁生由美子 (編) (2023). 『地方発 多文化共生のしくみづくり』 晃洋書房.

内閣府 (2010). 『高齢者の生活と意識に関する国際比較調査 (第7回)』. <https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/>

能勢桂介 (2025). 『消えた日系ブラジル人と多文化共生——日本衰退の転回点：リーマンショック』 悠人書院.

毛受敏浩 (2019). 外国人の活躍が地域活性化のカギになる『ガバナンス』 223, 15.

山口県 (2023). 『山口県多文化共生推進指針——山口県で暮らす日本人と外国人が共に活躍できる地域社会の実現に向けて』 山口県観光スポーツ文化部国際課.

Special issue on “Language and culture education in local governance”



Conference Symposium Lecture Records

Language and culture education in local governance

Symposiasts

TOKUDA, Tsuyoshi

*Otani University,
Kyoto, Japan*

OKA, Takanori

*Hirakawa no Kaze no Kai,
Yamaguchi, Japan*

OHTA, Nam

*Betoyama Co., Ltd.,
Yamaguchi, Japan*

GONDAI, Shoichi

*Mure Area Neighborhood Association Federation,
Yamaguchi, Japan*

Moderators

YAMAMOTO, Shinya

Shunan University, Yamaguchi, Japan

MATSUO, Noriaki

Gifu University, Japan

Abstract

This article is a record of the symposium held at the 11th Annual Conference of Association for Language and Cultural Education, which took place on 1st March 2025 at KDDI Ishin Hall (Yamaguchi Prefecture).

© ALCE 2025. Except where otherwise noted, this article is licensed under the CC BY-SA 4.0 license